

「たきかわっ子」の将来像と目指す教育

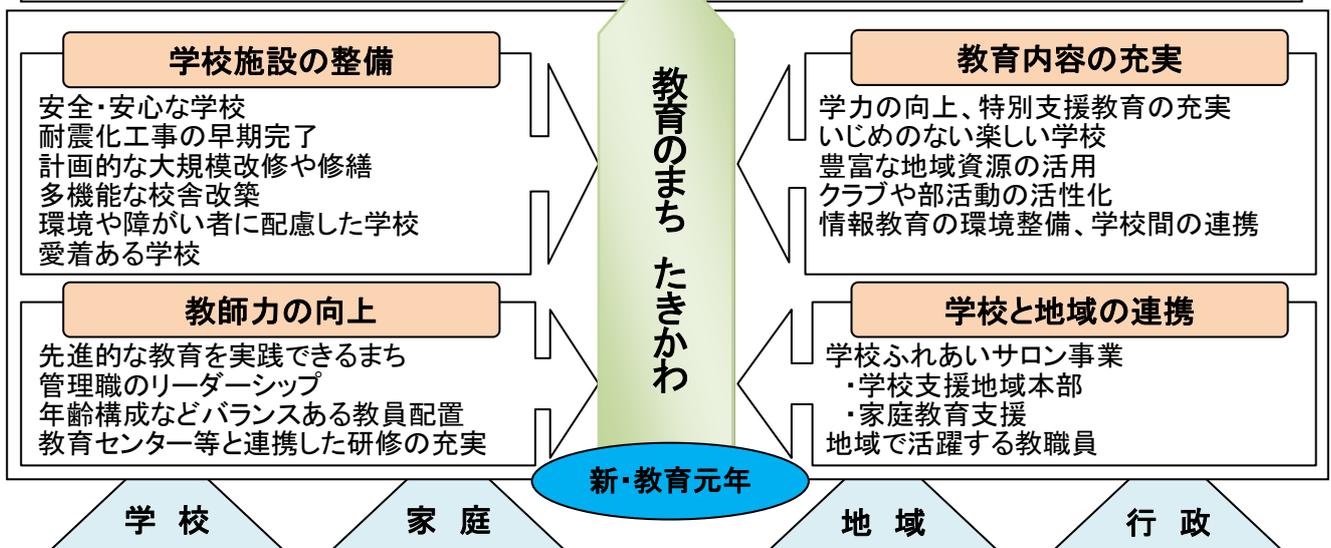
《小・中学校適正配置の基本理念》

滝川市教育委員会では、次の3つの基本的な理念のもとに、小中学校の適正配置の取り組みを進めます

- ◎確かな学力、豊かな人間性、健やかな身体を育む学校をつくります
- ◎個性に応じた、多様な学習内容や学習形態を可能にする学校をつくります
- ◎豊かで多様な教育活動が展開できる安全・安心な学校をつくります

21世紀の滝川市を担う子どもたちに必要な「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健やかな身体」などの「生きる力」を備えた、人間性豊かな子どもの育成を目指し、創意工夫を凝らした様々な特色ある教育活動を展開します。

未来を拓く「たきかわっ子」の育成



滝川市の現状

- 児童生徒数について
児童生徒数は、ピーク時である昭和57年の7,771人から平成22年には3,274人(ピーク時の42%)にまで減少しています。平成47年には約1,600人(ピーク時の21%)にまで減少すると推計されます。
- 学校施設の現状
・昭和30年代から昭和50年代前半に建築したものがほとんどです
・昭和56年の新耐震基準以前に建築された学校施設の耐震化が急務とされます
- 通学区域の現状
本市の現状として、通学区域が入り組んでいる地区や、通学距離の遠い学校に通学しなければならない状況などが生じていることから、通学区域の弾力的な運用を含めた見直しが必要です。

学校規模の適正化の必要性

○学校規模の適正化の必要性

- ・学校は確かな学力を身につける場であり、切磋琢磨し社会性を培う場であります
- ・効果的な教育活動を展開するには一定規模の集団を確保することが必要です



児童生徒の個性を伸ばし、社会性を育て、生きる力を身につけるためには、学習や生活の場として望ましい学校規模(=適正規模)を、実現することが必要です。

滝川市の学校規模及び適正配置の考え方について

○学級規模の考え方

子どもたちが安心して過ごせる楽しい場として、共に学びあい、活動することを通して意欲を高め、一人ひとりがかけがえのない存在として充実感を持つことができる「35人以下」の学級規模が必要です。

○学校規模の考え方

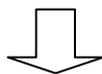
子どもたちの個性は、集団生活を通じて社会性を身につけ、様々な友だちと出会い交流するなど、一定以上の規模の集団の中で学び、生活していくことにより磨き高められることから1学年には複数学級が必要です。

〔児童生徒の教育面〕

- ・多様な個性と出会い、協調性、社会性を培うことができる学校
- ・新しい成長の機会を得られるための、クラス替えができる学校
- ・潜在的な能力を引き出すために複数の教員と係わることができる学校
- ・多様なクラブ・部活動を開設することができる学校

〔学校の運営面〕

- ・教員がお互いに指導方法等を研究、協議ができる教員数を確保できる学校
- ・教職員の校務の負担が増加しない学校



★滝川市における学校の適正規模

小学校の適正規模：12学級～18学級(各学年2学級～3学級)

中学校の適正規模：6学級～18学級(各学年2学級～6学級)

⇨ 適正規模を図るための方法

- ・滝川市の現状では通学区域の変更で学校の適正規模を確保することは困難
- ・原則として学校の適正規模を下回ると判断できる場合には統廃合に取り組む

滝川市小・中学校適正配置計画

○適正配置計画の具体的内容

適正配置計画の期間については、社会情勢の変化や児童生徒数の状況等により、平成 23 年度から平成 32 年度までの 10 年間とし、5年ごとに見直します。ただし、計画期間の途中であっても必要に応じて見直します。

◎小学校

【滝川第一小学校】

市街地空洞化の進行により児童数が減少しておりますが、計画期間内においては一定の児童数を有し、複数学級を維持できることから、存続とします。

【滝川第二小学校】

公営住宅や住宅街が広がり、現在、17学級と市内はもとより空知管内でも一番大きな小学校です。将来的にも、複数学級を有し適正規模を維持できることから、存続とします。

【滝川第三小学校】

周辺は、土地区画整理事業による住宅地が形成され、計画期間内においては児童数の増加が見込まれます。将来的にも、複数学級を有し適正規模を維持できることから、存続とします。

【西小学校】

古くからの住宅街にあり、高齢化率が高く児童数の減少が進んでいます。今後も児童数の減少が見込まれますが、計画期間内においては一定の児童数を有し、複数学級を維持できることから、存続とします。

【東栄小学校】

児童数の減少が進み、平成 18 年度から複式学級を有する過小規模校となっております。今後も児童数の増加が見込めず、平成 24 年度には、全学年で複式学級編制となり3学級以下の極小規模校になることが予想されます。複式学級は、1人の教員が同じ時間に異なった学年の児童を指導するので、教育効果を上げるのに大きな困難が伴うなど、子どもたちの教育活動や学校活動に支障をきたすことが懸念されます。市内のすべての子どもたちが同じ教育環境で学ぶことができるよう、平成 24 年度に東小学校へ統合します。

【江部乙小学校】

現在、1 学年 1 学級で適正規模を下回り、今後も児童数の減少は予想されるものの、計画期間内においては、複式学級編成にはならない状況です。また、江部乙地区については通学区域が滝川地区の2倍以上と広大であり、現状でもスクールバスで登下校に1時間近くかかる児童がいます。統廃合を実施した場合に、登下校に係る体力面や通学時間の負担が増すことなどから、存続とします。

【東小学校】

国道 12 号バイパス沿いに郊外型大型店が進出するなど、都市化が進んでおり、計画期間内においては児童数の増加が見込まれます。将来的にも、複数学級を有し適正規模を維持できることから、存続とします。

◎中学校

【江陵中学校】

現在、14 学級で適正規模となっています。計画期間内においても、適正規模を維持できることから、存続とします。

【明苑中学校】

都市化が進み、今後生徒数の増加が見込まれます。将来的にも、適正規模を維持できることから、存続とします。

【開西中学校】

古くからの住宅街にあり、高齢化率が高く生徒数の減少が進んでいます。今後も生徒数の減少が見込まれますが、計画期間内においては一定の生徒数を有し、複数学級を維持できることから、存続とします。

【江部乙中学校】

適正規模を下回りますが、江部乙小学校と同様の理由で、当面は存続とします。しかし、教職員数が少ないため、教科指導上の課題や、中学校における集団活動の展開や、部活動が、更に難しくなることが想定されることから、保護者や地域の方の意見を伺いながら、今後のあり方について、早い時期からの検討を進めます。

東栄小学校の東小学校への統合について

平成24年度の統合に向けて、両校の保護者や学校関係者からなる「(仮称)統合準備委員会」を設置し、統合に向けた諸課題(児童・保護者・教職員の事前交流・スクールバス運行・記念行事等)について検討協議を進めるとともに、両校の子どもたちがスムーズに溶け込めるように交流学习を行うなど、統合後の不安を取り除く環境づくりを推進します。

○目標とする将来像

校舎等の改築時に児童生徒数の推移を見極め、全市的なバランスのとれた学校配置を考慮します。小学校については5校での再編、中学校については2校での再編が想定されます。

小学校

市街地の空洞化が進み、このまま児童数の減少が続くと、滝川第一小学校においては、各学年単学級となります。学校区が隣接する4校との距離も近いことから、隣接校との統合を含む再編が考えられます。

中学校

開西中学校においては、このまま生徒数が減少すると、中学校における集団活動の展開や、部活動の選択肢や部員の確保が難しくなることから、隣接校との統合を含む再編が考えられます。